

秋田県男鹿市で採集されたヒラスズキ

船木 信一*

スズキ科スズキ属ヒラスズキ *Lateolabrax latus* Katayama は、同属のスズキ *L. japonicus* (Cuvier et Valenciennes, 1828) によく似ており、混同されることが多く、個体数が少ない分布域での記録が見逃されやすい種の一つである。スズキに比べてより温暖な海域を好み、五島列島や紀伊半島、伊豆半島、室戸・足摺岬など、黒潮の影響を色濃く受ける場所の岩礁地帯に多いとされる。図鑑によりその分布の記載は様々で、多くは静岡県～長崎県とされているが、日本各地の釣りや漁、新聞等の記録には、太平洋側では房総半島以南、日本海側では佐渡、能登半島以南、南は沖縄県久米島で確認されたという情報が見られる。なお、北限あるいは南限と思われる佐渡や能登半島、沖縄県などからの情報は多くない。

秋田県では、男鹿半島を中心に過去に何度か漁師の網に入った、あるいは若い個体が釣り上げられたといった情報があったが、いずれも正確な同定にはいたらなかった。今回確認した個体(図1)は、2013年11月9日男鹿市戸賀の磯で、南秋田郡八郎潟町の齊藤治氏によって釣り上げられたものである。スズキより幅のある体高やその他の特徴などでヒラスズキと判断されて、当館に寄贈された。詳細を調べた結果、

- ・尾柄は短く太い(図2)
- ・尾鰭の切れ込みは浅い(図2)
- ・背鰭軟条は16本(図3)

という特徴を備えており、形態的な特徴はヒラスズキのものと合致した。また、ヒラスズキには必ず存在する特徴である下顎の鱗の列も見られる** (図4) ほか、各鰭が黒っぽい、頭部の大きさの割に眼が大きいなどの特徴も兼ね備えている(図1) ことから、秋田県での初めての確実な採集例としてここに報告したい。

解剖の結果、卵巣を確認したほか、胃袋は小魚の骨で膨満し、内臓の周りに多量の脂肪が蓄積しているのを認めた(図5)。脂肪量の重量比は、

エタノール固定後の測定で全内臓量の約42.8%であった。この個体が死滅回遊魚のように対馬暖流に乗って流されてきたものであれば、水温が下がる11月には活性が低くなる可能性が大きい。しかし、解剖の所見からは、この個体が秋の荒食い状態にあり、活発に採餌していたことがわかる。このことから、この個体が偶発的に流されてきたものではないことが推定されるが、恒常的な生息に関しては、県内の有志により追跡調査が継続されるので、今後の報告に期待したい。

末尾ながら、本資料をはじめ、男鹿半島での魚類分布に関し、貴重な資料と情報を提供していただいている船木和久氏と、本資料を快く寄贈してくださった齊藤治氏に深謝する。

文献

- 中坊徹次編(2000). 日本産魚類検索 全種の同定 第二版 東海大学出版会
益田一, 尼岡邦夫, 荒賀忠一, 上野輝彌, 吉野哲夫編(1984). 日本産魚類大図鑑 東海大学出版会

* 秋田県立博物館 ** 下顎の鱗列はスズキやタイリクスズキでも稀に見られる。



図1 全身



図4 下顎部



図2 尾柄部および尾鰭



図5 卵巣および腹腔内の脂肪



図3 背鰭軟条